岩倉の狂女懸せよほとゝぎす　燕村

ほとゝぎす啼くかと待てば蜘の糸　几董

ふつゝかな我手悔みて夏書哉　大石士川

袷着て雨に寒がる僕（しもべ）かな　菱湖

待宵の身にしむ懸や絹袷　定雅

短夜やいとま給はる白拍子　燕村

短夜や鐘聞けば又鐘が鳴る　之兮

題後朝

短夜や伽羅の匂ひの胸ぶくれ　几董

寐急ぎの嬬を後に咄かな　銀獅

一夜二夜蚊屋めづらしきにほひ哉　沼戸春武

淺ましや嬬に透きたる夜のもの　召波

橘や嬬に碁をうつ老二人　田福

蚊屋を出て物爭へる翁かな　大魯

捉げて行く牡丹重たき風情哉　春坡

懐舊

牡丹折りし父が怒ぞなつかしき　大魯

廣庭のぼたんや天の一方に　燕村

島散餘花落

かきつばた魚や過ぎけむ葉の動き　几董

檜扇の葉に洩る顔や燕子花　嵐山

蛇落ちて驚く崖のわか葉哉　維駒

嵐山松の四月となりにけり　松島白居

道芝に葵（あおひ）祭の轍かな　隨古

よく見れば朝露持ちぬ夏の艸　江戸登舟

百合の花人もれぶたき盛かな　成文

こがれたる雨を握て田唄哉　几圭

佐屋のわたりにてひとり小舟をや

り早苗とるを見て　曉臺

つまなしがさす手ひく手や田植舟　也好

芥子散るや脱の衣のひとかされ　寄節

よわ〳〵と蓼も生えたる淺瀬哉

野の宮や笹の古葉の落る音　來之

夕暮や野に聲殘る麥の秋　楚秋

麥秋の草臥聲や念佛講　几董

方丈石

待ち歩りく家はいづくへ蝸牛　蝶夢

怠らぬあゆみ恐しかたつぶり　太祇

蝸牛君がかたへともゝすじり　雁宕

點滴にうたれて籠る蝸牛　蕪村

洛東芭蕉庵にて

蕎麥あしき京をかくして穗麥哉　同

むしり來し園のさゝげや長短　鶴英

夢の間や茄子大きくなりにけり　旨原

有感

生きて世に人の年忌や初茄子　几董

箏に鋤借りにくる庵主哉　維駒

萍や樋を越す水にさそはるゝ　呑獅

我家のうしろを過ぎて田植哉　雷夫

早乙女や先づひいやりと庭の土　江戸超波

郊外

都邊はいつともなしに青田哉　雁宕

物問へば出て〳〵答ふる蚊遣かな　如瑟

宿借さぬあるじつれなき蚊遣哉　伏見湖陸

青梅や女のすなる飯の菜　太祇

青梅に眉あつめたる美人かな　蕪村

烟雨に青カツシが已に黄にナンヌ
といへるに

青かつし色としもなき煮梅哉　几董
夏の月平陽の妓の水衣　召波
遠浅に兵舟や夏の月　蕪村
さみだれや三線かちるすまひ取　大魯
さみだれや我宿ながらかゝり舟　罕秋

通宵待戀といふことを

占かたは獣にあらで水鶏哉　道立
田の水を庭に引かせて螢かな　維駒
飛ぶ螢蚊にこけても可愛けれ　移竹
剣うつ水により來るほたる哉　管島

瀬田夜泊

飛ぶ螢閣の長橋かけてけり　明舉

船頭の噪を逃げるほたる哉　在江戸　蕪史
風薫る森の木陰や弓の音　文波
背戸口に砥汁流るゝ菖蒲哉　大津　巨洲

かの東皐にのぼれば

花いばら古郷の路に似たる哉　蕪村

東武にありて隅田川に遊ぶ

都思ふ時や卯浪の薄曇り　義仲寺僧　沂風
正宗が刃をわたる清水かな　正巴
かけ山の髭をしぼりて清水哉　召波
祇園會や胡瓜花咲く所迄　超波
閣がりに座頭忘れて涼みかな　也有
涼み居て閣に髪干す女哉　召波
弟子僧と寺住みかへて避暑哉　維駒

人皆青炎熱

涼しさや花屋が鄙の秋の草　凡董
（すずしさ）
蹤のおし動かすや雲の峯　同
（ひづめ）
桐の木の梢に近し雲の峯　是岩

蓮に誰小舟漕ぎ來るけふも又　如菊
巻葉より浮葉にこぼせ蓮の雨　杉月
とく起きよ花の君子を訪ふ日なら　召波
釣舟に御僧を乗せて蓮見哉　維駒

讀李斯傳

厠なる扇も喰らふ風かな　凡董
鄙びたる細工ゆかしき團哉　熊三

納涼二句

汗入れて身を佛體と知る夜哉　我則
床涼み笠着蓮歌のもどりかな　蕪村
葛水や頃に玉の音すなり　道立

葛水や浮べる塵を爪はじき　凡董

相國禪寺なる
維明和尚の許にて
筍羹をもてなし給ふに

篁心（たかむしろ）の塵もはらひけり

郊外

夏の暮煙草の蟲の咄し聞く　重厚

御祓（みそぎ）の夜鴨川にて

むすぶ手に翠の秋知る清水哉　五雲

脇起俳諧秋

栗に飽いて隣に付く鼠とらへけり　春泥舎召波
三度起出し菴の永き夜　維駒

遠からぬ海の音聞く有明に　凡董
島の中を駕のちかみち　同
鵂狩の御先見ゆるとほのめきて　駒
初雪降れり師走ついたち　同
朝込に針屋が茶の湯おもしろや　董
もの心得し從者持ちけり　駒
うち惱む同車の君をかき抱き　董
忍びし宵の月は細くて　駒
片里はまだ蚊遣する秋の風　董
古葉と共に棄こぼるゝ　駒
罩丸見よと階子のもとによりかゝり　董
法師をなぶる仁和寺の兒　駒
弦切れし倭琴代々經る虫拂　董
眞午時の皷徐にうつ　駒

花ひとひら老杜が春やうつろはむ　董
雁行く頃を松島の旅　駒
右に見し山は左にうちかすみ　同
楫取飯を喰ひこぼしつゝ　董
轉寢を起きよ〳〵と呼ばるなり　駒
沈香炷いて懼る神鳴　董
願ひある女心のひたすらに　駒
廊の月日はてしなの身やつれ　董
いざよひの鐘も冴え來る萩の庭　駒
露にひそみて哭く翁丸　董
朝寒く宿直の皮籠背負ひ行く　駒
水ばなれたる年ぞつれなき　董
納戸から京酒出して振舞はれ　駒
寺の跡目の公事に骨折る　董

さみだれにひとの足駄の履き悪き　同
早う芝居の果てし古市　駒
紫にうこんの絹を打かづき　同
官位たべよと狐狂はす　董
別殿を花の林に移し來て　同
二月寒く遲き日を待つ　駒

其二

白馬寺に如來うつして今朝の秋　維駒
千草の花の露もあまねき　百池
ひよどりの毛衣振ふ月更けて　鐵僧
我ひとり乘る舟を待ちげり　駒
古郷の便うれしき年の暮　池
關に進む烏帽子狩衣

朔日の空となり行く山かつら　僧
松より高き市の葉柳　駒
盜人を女心に迫ひかけて　池
熱き病をふと忘れたり　僧
辟だみて仁王經を誦しぬらん　駒
日毎の雨の中に氷降りす　池
うたかたの阿波の小島に船破りて　僧
堺の住居三とせ古りぬる　駒
商ひを夫婦が中に仕覺えつ　池
髪をはらげる春の宵月　僧
風もなくてうつろふ花の薫り來る　駒
申の口の出入のどけき　池
さまくの事を鸚鵡のいふ日哉　僧
高麗人の碁や勝となるべき　駒

うつゝなう抱きよせたる膝がしら　池
目離ぬ戀の責る身の秋　僧
琵琶うちの翁いたはる雨の月　駒
紅葉のかげを下す川舟　池
三聲啼いていづち猿の去りぬらん　僧
宿ゆるされし竹溪の坊　駒
見苦しき物おし包む小風呂敷　池
養君の言葉給はる　僧
盃に匂ひしたゝるあやめの日　駒
横座と付きし牛を遊ばす　池
天王の鳥居のあたり土肥えて　僧
雨の後なる日和うつくし　駒
なつかしきかますこ賣のとがり聲　池
入口の戸の埃けうとき　駒

花守が春いそがしと　僧
足洗ふなる水のあたゝかさ　池

秋之部

起きよ今朝桔梗の雫ふりかけむ　青峨
水無月のからきめを見て今朝の秋　江戸存義
水底に青砥が錢やけさの秋　召波
朝貌や星の別れをあちら向　加賀千代尼
我屋根をはづれてゆかし天の川　超波
露更けて淀に落つるや天の川　道立

病起

嗣越しに鬼を笞打つ今朝の秋　蕪村
角力取の身をひそめてや魂迎　也好
盆二日過ぎて出來たる燈籠哉　一差

彩らぬ切籠の總に秋の風　凡董

傾城に腕見せけり相撲取　松化

市中

躍子や夕間暮れして狂はしき　大魯

うかと出て家路に遠き躍哉　召波

細腰の法師すゞろに踊かな　蕪村

魂祭り八千代諷ひし一座なり　蓍國

咲いてうれし墓のほとりの草の花　菱湖

みなへし雨にうたれて老いにけり　湖柳

由井の濱づたひして

朝露や浪やはらかに磯の草　太祇

紙屋川花野に橋をわたしけり　田梅

穂に出て、山田に交る薄かな　二貞

落日の潜りて染る蕎麥の莖　蕪村

宮城野の野外武藏野に似たり

萩原やかたしの鐙こゝにあり　雁宕

雁鳴くや御殿〳〵の戸さし頃　自笑

紀路にも下りず夜を行く雁孤つ　蕪村

旅中

川霧や馬打入る水の音　太祇

霧こめて道行く先や馬の尻　凡董

若煙草丹波の鮎の片荷哉　維駒

衣打つ片手に酒の小賣かな　大石士喬

城跡の一段高し蕎麥の花　雅因

大名をとめて蘇鐵の月夜哉　田福

名月や下戸の建てたる藏引かん　江戸多少

三井寺にて

院々の古き硯やけふの月　雁宕

名月や兎の糞のあからさま　超波

名月の明くる朝日や伊勢の海　百池

今落す水に影さす月夜哉　菅島

らめしきまでに月澄む夜明かな　樗良

良夜

名月や落るものとは思はれず　嵐山

家賣つた金なくなりぬ秋の暮　鶴英

合點して傾城買ふや秋の夕　田原也竺

いつも來る乞食の聲や秋の暮　春坡

老懷

去年より又淋しいぞ秋の暮　蕪村

雑炊に月の明りの榮花かな　櫻磨青蘿

野人皆戻りて後の月見かな　維駒

飛ぶ雁の影や几に十三夜　成文

きりぐす行燈にあり後の月　二柳

稲荷に詣る道のほど

稲の葉の青かりしより案山子哉　月溪

月雪や花にもよらず鳥おどし　臥央

拾ひあげて扇にはさむ落穂哉　女まさ

喰ひかゝり殘すべからず唐辛子　來雨

唐辛子つれなき人にまゐらせん　百池

雨中九日病起

試に下駄の高きにのぼりけり　鐵僧

鼻たれる朝のはじめや今日の菊　几圭

白菊や靜に時のうつり行く　涙花江涯

茄子引いて菊に苔の見ゆる哉　高砂布舟

柿紅葉遠く竹割るひゞきかな　佳棠

ながらへて野分にあへる胡蝶哉　伏水鹿卜

市小家に火ぶせの札や秋の風　維駒
夏をむねと造れば庵に野分哉　也有

遊仁和寺

君知るや花のはやしを紅葉狩　几董
掃く音も聞えて淋し夕もみぢ　蓼太
白河も黒谷も皆紅葉かな　嵐山
谷紅葉夕日をわたる寺の犬　烏西
あながちに紅ならぬ紅葉哉　橘仙
高雄山あはれに深き紅葉かな　瓦全
高雄山杉にうつれば日も寒し　曉臺

探題を得て

選り出して淋しき色や青蜜柑　鼓舌
酒になり餅になる稲の穂並哉　左海　吳逸
から〳〵と外田に残る鳴子かな　芭蕉庵下　松宗

明けばまた夜寒の雨戸つくろはむ　召波
稚子の二人親しき夜寒哉　旨原
雨風の日和をさまる夜寒哉　大魯
罔両の襟かき合はす夜寒かな　魚官
夜を寒み小冠者臥たり北枕　蕪村

蕪叟を幻住庵にとめて

曉の寐すがた寒し九月蛔　曉臺
暮の秋むま子ひゝ子俵積中に　臥央
四五反の衣裁ち残す昏の秋　湖嵐
行く秋や蹴抜の塔を散る木葉　加賀　麥水
椎柴のはづれ〳〵や秋の霜　維駒

故人にわかる

木曾路行きていざ年よらん秋一人　蕪村

九月三十日須磨のうらづたひして

はるゝと來てわかるゝや須磨の秋　凡董

古寺に狂言會や九月盡　雁岩

閑居

小鍋買うて冬の夜を待つ數寄心　凡董

冬之部

驚の忍びありきや夕しぐれ　太祇

初しぐれ風もぬれずに通りけり　千代尼

はつ時雨濡れて淋しき羽織かな　琴堂

ともかくも時雨次第の高雄哉　歸厚

しぐるゝや南に低き雲の峰　凡董

茅簷

初冬や空へ吹かるゝ蜘の糸　召波

傘に相違あらざる十夜哉　素文

我戀は婆になりたる十夜かな　蓼太

門前の家は寐てゐる十夜かな　月居

鹿喰へと人はいふなり冬ごもり　道立

旅をする春の思案や冬籠　正巴

冬籠燈光瓜の眼を射る　蕪村

負郭

四ッ谷から馬糞のつゞく枯野哉　青峨

又或日扇遣ひ行く枯野かな　曉臺

冬ざれや北の家陰の韮を刈る　蕪村

落葉かき若きも老と見られけり　雪居

茶の花や隱者がむかし女形　鐵僧

黄昏や花落ちかゝる茶の木原　維駒

氷落石出

冬川にむさきものの啄む烏かな　凡董

降るものに敷ある冬の日和哉　波牛
こがらしや後(うしろ)の山も遠からず　社燕
石蕗の葉をうち破(キ)ら ぬ霰哉　熊三
小坂殿のはり縄朽ちて霰かな　鶴汀
一殿(ひとゝの)まじろがぬ鷹のけしき哉　也好

初霜や茶碗を握る掌　仙蓋　秋來

法隆寺

もろこしの鐘も聞えぬ霜の夜半　蝶夢
鐘氷る俊恵が寺の寐覺哉　白石　乙二
道連に別れて浦のちどり哉　伊丹　東瓦
四五羽立てたちもどりけり洲の衛　道立
闇を鳴く沖のちどりや飛ぶは星　几董
小夜(さよ)千鳥加茂川越ゆる貸蒲團　無腸
待の間は風もなくて古蒲團　百池

埋み火を無下に乞はるゝ隣かな　我則
撫る手も一葉に似たり桐火桶　心頭

尼になりし時

髪をゆふ手の隙明いて炬燵哉　千代尼
山もとの里と申して炬燵かな　廣島風律
冬の日や解けては氷る忘れ水　浪花一鼠
凍やしぬ人轉びつる夜の音　伏水鷺喬
馬蹄今さりとは雪の酒屋哉　成文
雪まろけ大きな物になりにけり　甫尺
はつ雪や大名通る四つさがり　越前梨一
處々雪の中より夕けぶり　關更
したゝかに炭こぼしけり雪の上　銀獅
貴人と知らでまねらす雪の宿　之兮
雪の戸に立てかけて置く箒かな　加賀佛仙

初雪にしるしの竿は立てしかどそ
ことも見えぬ越のしら山

初雪のしるしの竿や草の莖　几董
いざ雪見容（かたちづくり）す簑と笠　蕪村
古枝を鴉喰ひ折るか雪の暮　其成
凍る夜や地より蹴放す馬蹄　仙臺　仞宮
ともし火に氷れる筆を焦しけり　大魯

古硯銘

鈍きもの先づ氷るなる硯かな　几董

王羲之

物書いて鳴にかへけり夜の雪　笹山　庶堂
かさゝぎや葱洗ふ川を蹈み渡る　古貢
水鳥の水に親しき古江哉　暮蓼
水の面に入日殘りて鴛の聲　春香

鴨打ちに城下出るや小殿原　魚赤
羽を干すや小島の松にはなれ鶯　斗文

古丘

水仙に狐遊ぶや宵月夜　蕪村
寒月に角力が宿の稽古哉　子曳
病める身の蒲團を替ふる小春哉　大石　守明
南宗の貧しき寺や冬木立　月溪
門見えて爪上りなり冬木立　丹波　仙魯
辻君に衣借られなはちたゝき　舊國
頭巾着て尊くなりぬ鉢敲　宮津　路景
旅人に錢もらひけり鉢たゝき　佳棠
寐て聞いて四へ過ぎけりはち叩　佳則
しのゝめや水に雪降る網代守　士川

雪中

ゆきゝせで年暮るゝ雪の山家哉　通助
家中衆の忍び〳〵や年忘　召波
年忘れ昔念者と若衆かな　青峨
臘八や和尚漸く老成り　雁宕
とし〳〵や二人の親の煤ごもり　信州米居
行年や又訪ふ家もすゝ拂　維駒
傘はて行き來ふ年ぞ蝸牛　文梁
剃りこかす若衆のもめや年の昏　大祇
ゆく年の女歌舞妓や夜の梅　蕪村

除夜遊青櫻

年隱す遣手が豆を奪ひけり　几董
なつかしき月の栖や大三十日　移竹

脇起俳諧冬

冬ごもり五車の反古のあるじ哉　維駒
ひとり寒夜に鉢打つ月　鐵僧
郊外何焚くやらん煙して　臥央
流の末の水は二筋　蕪村
枝伐つて一のまぶしを定むらし　百池
甥の太郎が先づ口を利く　也好
新宅の夏を住みよき柱組み　春坡
水うちそゝぐ進物の鯛　正巴
裂けやすき絲の亂の古袴　之兮
妻を奪ひ行く夜半の暗きに　道立
ちら〳〵と雪降る竹の伏見道　我則
小荷駄返して馬嘶ふらん　自笑
泣く〳〵も棺を出す暮の月　佳棠
よからぬ酒に胸を病む秋

小商ひ露の生野の旅なれや　湖柳
燕來る日の長閑なりけり　湖嵐
反古ならぬ五車の主よ花の時　几董
春やむかしの山吹の庵　田福

右一巡捻香

鏡とらば二つの鬢や枯尾花と父が
病中の吟を見て往事を思ふ
父が世にかはらぬ色や枯尾花　維駒

長和治安の昔、關白道長公法成寺の御堂造らせ給ひしに、國々の受領より竹木瓦石の類ひ舟車に積みて持運びつゝ金銀珠玉の七寶をもて玉の臺調ひしかば、千萬の僧威儀具足して梵音錫杖の聲を唱へて讃を誦し、舞人樂人糸竹管絃の曲を盡し、種々の名香天に薫じ花降り風やはらかに草木すら皆法(のり)を說くと聞ゆ。かゝる供養の結構は、昔も今もためしなきめでたき事にいひあへりとかや。爰に此編は古春泥居士の遺訓を追うて息維駒志願を發し、國々の俳諧者流の句を拾ひ、居士が舊識知音の吟を集め、或は當時の詞友に句を乞ひなどして、かの良材金石をもて一集を供養せんとなり。予自ら筆を採りて此行に微力を添へ、撰成つてこれを先人の牌前に供す、その功德見佛聞法の結緣なるべし。且太祇移竹嵐山の徒をはじめ數輩の古人、再集中に出現し

て、風月花島の吟を諷誦す、さは是自他平等の追善おほかたならぬ利益ならずや。

天明三卯歳十一月　　春夜樓晋明書

俳諧蕪村七部集終

明治四十四年　二月十　日印刷
明治四十四年　二月十四日發行
明治四十四年　二月二十日再版發行
明治四十四年　三月二十日三版發行

袖珍文庫
27蕪村七部集

正價貳拾五錢

編輯兼發行者　東京市神田區佐柄木町廿一番地　鈴木種次郎
發行者　東京市本所區吉岡町十二番地　山本銀次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市神田區佐柄木町　三教書院
電話眞本局三三六一番
振替東京四五八〇番

改正定價金參拾錢

袖珍文庫大賣捌所

關東賣元　東京市神田表神保町　東京堂
關西賣元　大阪市東區北浪速町　杉本梁江堂
中京賣元　名古屋市西區玉屋町　星野文星堂

東京日本橋　林平書店　新潟　萬松堂
同　至誠堂　京都　東枝書店
同　文林堂　岡山　山陽書籍會社
同京橋　前川書店　廣島　積善館支店
同　東海堂　久留米　菊竹書店
同　北隆館　博多　積善館支店
同神田　勉強堂　京城　日韓書房
同　上田屋　大連　大阪屋號

◉其他全國各書店

袖珍文庫目錄

1 いろは文庫 上編
2 いろは文庫 中編
3 武將感狀記 全
4 文章軌範 全
5 平家物語 上編
6 俳諧七部集 全
7 平家物語 中編
8 修紫田舍源氏 一編
9 いろは文庫 下編
10 平家物語 下編
11 鑑田川梅柳新書 合卷
12 修紫田舍源氏 二編
13 萬葉集 上卷
14 東海道膝栗毛 上編
15 俳風やなぎ樽 一輯
16 古今集 全
17 修紫田舍源氏 三編
18 枕の草紙 全
19 東海道膝栗毛 下編
20 修紫田舍源氏 四編
21 武經七書 全
22 徒然草 全
23 十三百人一首 全
24 聯珠詩格 全
25 俳風やなぎ樽 二輯
26 聽雨月物語 合卷
27 世間猿蓑村七部集 全
28 浮世風呂 全
29 繪本太閤記 一編
30 常山紀談 一編

【近刊】

繪入 釋迦八相倭文庫 一編
繪入 風俗文選 全
繪入 春色惠の花 全
繪入 梅こよみ 四鶴物 一輯
繪入 假名文章娘節用 全
繪入 清談若緑 全
繪入 近世說美少年錄 一編
繪入 水滸傳 一編
繪入 古事記 全
近松淨瑠璃 一輯
繪入 八笑人 全
松の葉 全

故山田美妙先生作歌
目賀田萬世吉先生作曲

獨唱 **佐久間大尉**

全一冊
正價貳十五錢
送料四錢

大好評

佐久間大尉の最後は戰死よりも壯烈なりき。積水の底、毒瓦斯に籠められ筆を走らせて公の遺書を認む。其境其文、其人、塞に千載に傳ふべし。故文豪美妙齋山田先生、最後の病床に入るに前だつ數日、この篇を作る字に泣き、句に哭す。先生歿後目賀田先生之に譜を附しこゝに悲壯無比の獨唱成れり。實に斯界の偉觀と云ふべし。

發兌元 東京神田 振替東京 (四五八〇番) 三教書院

NEW ARABIAN NIGHTS

BY

RAPRT LONIS STEVENSON

文學士若月紫蘭
帆行徹巖
譯 伯小杉未醒畫
裝 幀織田一磨

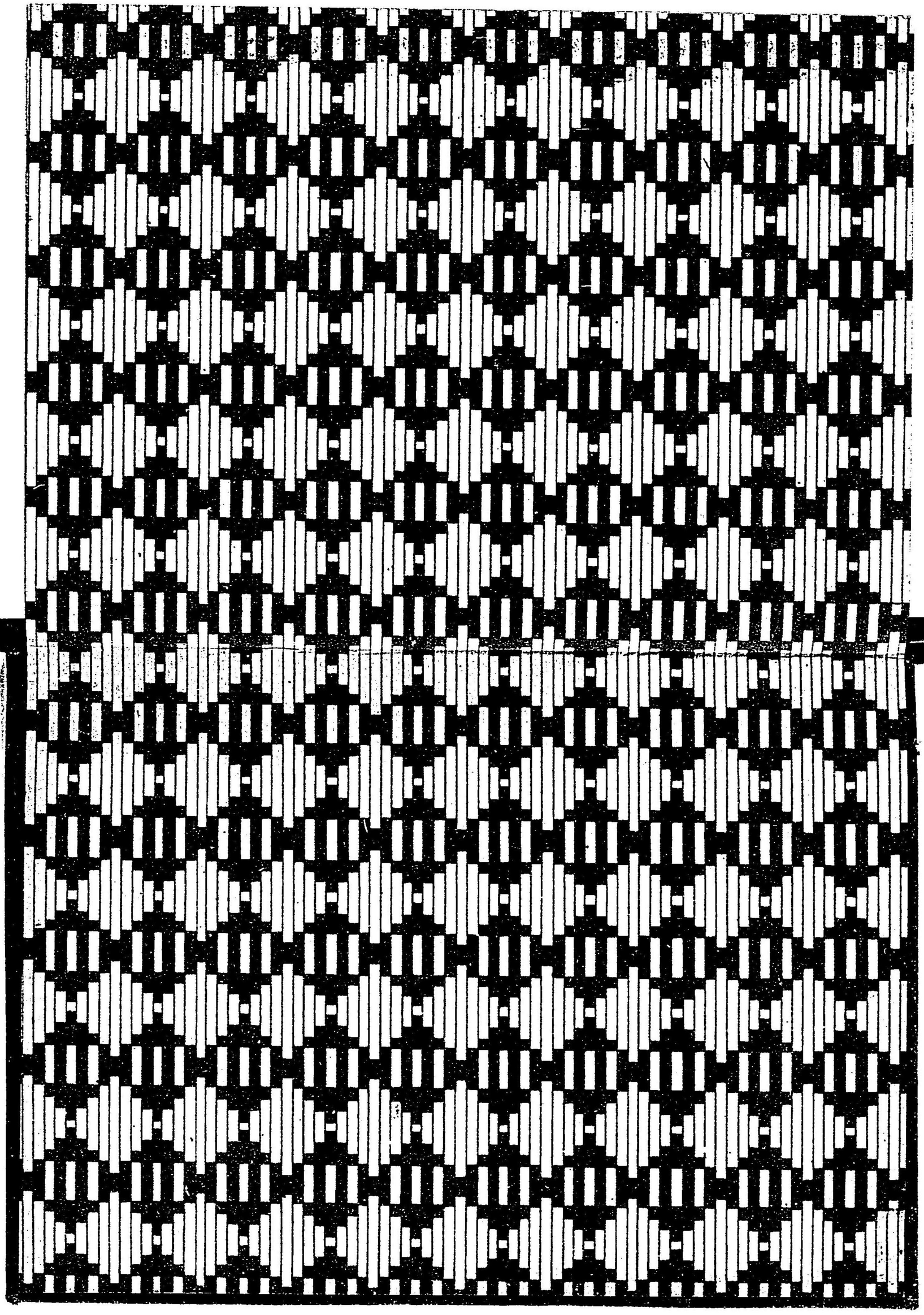
洋裝菊版九百頁
挿畫拾二枚
正價一圓五十錢
送料一册拾弐錢

内容

自殺倶樂部
大寶石
別莊の美人
不思議な家
夜の宿

アラビヤン、ナイトを讀みて
ニューアラビヤンナイトを讀
まざるは讀書子の恥辱なり

發兌元 東京神田 振替東京 四五八〇番 三教書院



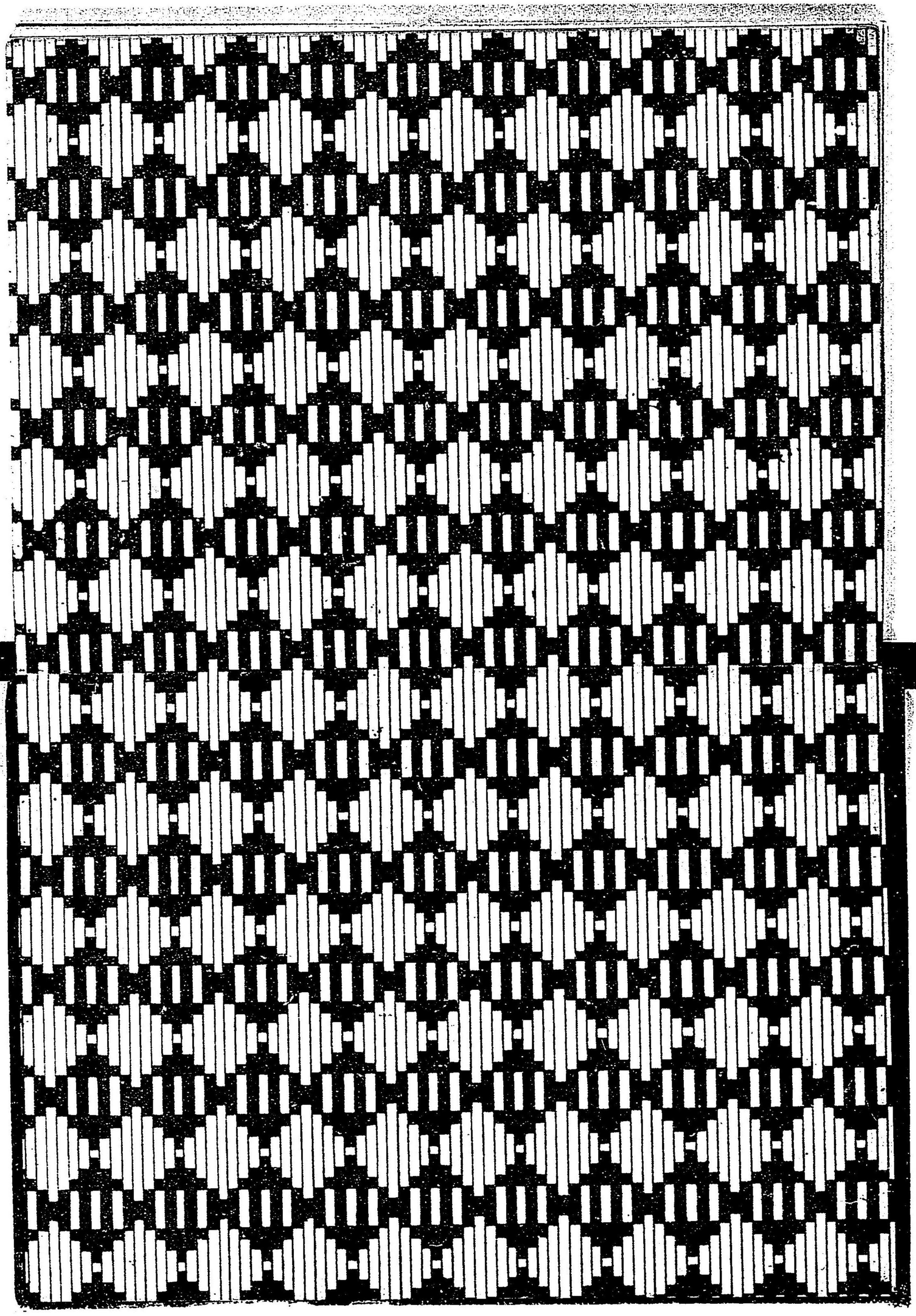
911.34
Ta864b

087527-000-1

911.34-Ta864b

蕪村七部集

谷口　蕪村／著

M44

DBE-0896